

インドネシアにおける民主主義を巡る言説

——「指導される民主主義」にいたる過程——

高 地 薫

はじめに

1998年5月にスハルト大統領を退陣に追い込んだ改革（レフォルマシ）運動の高まりと共に、そしてとりわけスハルト退陣後に、インドネシアの民主化はインドネシア国内外でそれまで以上に盛んに論じられた。と同時に、初代大統領スカルノに関する関心がいや増し、彼に関する書籍が爆発的に出版された⁽¹⁾。

このスカルノ人気、ひいてはその娘メガワティ現インドネシア大統領の人気は、スハルトではないなにかを指示するシンボルとして、スカルノが最も強力だからである(白石 1997: viii-ix)。しかし、スカルノ個人が復権し、見直される一方で、彼の政治に対する関心や反省は民主化の文脈の中で十分に為されているとは言い難い。1959年、インドネシア初代大統領スカルノは、‘西洋風’の議会制民主主義を廃止し、自ら「指導される民主主義（Demokrasi Terpimpin）」と名付けた体制を導入した。この体制はまた、スカルノが民族主義勢力、イスラムを中心とする宗教勢力、そして共産主義勢力の間のバランスを取ることで政府をコントロールしていたため、ナサコム体制とも呼ばれる⁽²⁾。「指導される民主主義」下において、国民による直接選挙で選出された議会は解散され、しかし新たに選挙が行なわれることはなく、国会議員は大統領により任命されることとなる。この‘民主主義’は、今日の我々が理解している、人民主権や、基本的人権、自由権、平等権、あるいは多数決原理、法治主義を

属性とするものとはおおいに隔たりがある。

インドネシアは独立後、共和国として民主主義を掲げてきたが、その政治体制はそれぞれ特定の修飾辞を伴った「民主主義」で呼ばれたり、あるいは自らを呼んだりする。「指導される民主主義」以外に、「立憲民主主義」、「議會制民主主義」、「パンチャシラ民主主義」などである。

独立戦争後のインドネシアでは、暫定的に国民による選挙を経ず大統領の任命で成立した国会を基盤に「民主主義」が行なわれていた。1955年に実施された第一回総選挙においては、インドネシアの人々は「民主主義が完成する」ことを期待したものの、結果は全般的失望であった。その後スカルノは、当時の「民主主義」に否定的な発言をしはじめる。1956年には、青年の誓いの日の式典において政党を葬り去れと叫び、翌年には自ら「大統領構想 (Konsepsi Presiden) と呼ぶ改革プランーしかし、内実はなきに等しかった一を公表した。それに続き、彼は自らの考えを「指導される民主主義」という言葉に結晶化させ、その実施を推進していくことになる。陸軍のナスティオン將軍と同盟を結び、地方反乱に対して戒厳令を施行すると (白石隆 1997: 76)、1959年7月5日にスカルノはついに「指導される民主主義」を導入した⁽³⁾。

スカルノが議會制民主主義を廃し、もはや自由選挙を前提としないシステムを導入したことは、インドネシアにおける民主主義が被った最初のドラスティックな変化であった。

この体制は、共産党によるクーデタ未遂事件とされる9月30日事件によって終結することとなる。この事件によりスカルノは政治の舞台から逐われ、スハルトが権力の座に就き、その体制は1998年まで続いた。両者の体制は様々な点で異なるが、自由で正当な選挙は行なわないという‘伝統’を維持するという点においては、スハルト体制はスカルノ体制の延長とも見做せる⁽⁴⁾。1998年、「レフォルマシ (改革) 運動」によりスハルトが辞任に追い込まれた後、1999年にインドネシアは1955年以来初めての「民主的」な総選挙を経験することと

なった。

この論文は、「指導される民主主義」が成立した過程を、「民主主義」を巡る当時の言説に焦点をあてて議論し、その成立過程においてスカルノのことがどのように変化し、他の政治勢力がどのようにそれに対応し、それを受容ないし拒絶したかを見ていく。ここでは、スカルノが現実の行動のみにおいてではなく、ことばの世界においてもその力を発揮し、彼のことが、とりわけ語彙のレベルにおいて、支配的な言説を形成していくことが想定されている。彼のことが、一つの規範となり、それを破ったりそれに反対する者は政治の世界から排除されることになる。彼のことが形成する言説が、体制を支えるのである。特に、「民主主義」という言葉はこの言説において、非常に大きな変化を見せたものである。

本論においては、「民主主義 (demokrasi)」「革命 (revolusi)」「人民 (rakyat)」⁽⁵⁾ に、キー・ワードとして注目する。後述するように、「民主主義」はその意味を変化させ、議会主義との一致を失しない、「革命」は政治的言説において重要性を増していき、「指導される民主主義」において「民主主義」があたえられた意味・場所を理解するのに欠かせないものとなる。「人民」という言葉の用い方は、スカルノが統治者の意思と被統治者の意思をどのように一致させるのかを理解するのに重要である、スカルノのことがと共に、それに対して他の政治勢力や政治家がどのように対応したかを見る一例として、同じ時期のインドネシア共産党 (Partai Komunis Indonesia) のことばを取り上げる。また、一部において初代副大統領モハマド・ハッタのことがも比較対象として取り上げる⁽⁶⁾。

1 民主主義の完成：総選挙への期待

独立以前のインドネシアには、植民地期にオランダが設置した実質的に力を

もたない議会はあったものの、「民主主義」ないし議会主義に基づく政治システムは存在しなかった。しかし、独立後には「民主主義」はインドネシアという国家にとって最も重要な原則の一つとして掲げられた⁽⁷⁾。総選挙を翌年に控えた1954年の独立記念式典において、スカルノは「総選挙は、必ず、必ずや実施されなければならない。我々の革命の理想を満すために—そして我々の民族革命が自らに課した要求を満すために！」(Soekarno 1954: 199)と、総選挙の実現とインドネシア革命を結びつけ、総選挙が「我々の革命の要求を満す」ことへの期待を述べている。後の政治の展開との関連で、3つの問題がここで浮びあがってくる。すなわち、当時「民主主義」はどのように理解されていたのか、(インドネシア)民族革命はどのように理解されていたのか、そして、この二つの概念の関係は如何なるものだったのか、という問いである。この章では、総選挙までの「民主主義」をキーワードとして取り上げる。

代議制は独立宣言後すぐに導入された⁽⁸⁾が、独立戦争中はそれが機能するだけの余裕はインドネシア共和国にはなく、議員も任命制にせざるを得なかった。1949年にオランダからインドネシア連邦共和国⁽⁹⁾正式に主権委譲された後も、翌年に単一共和国となった後も政情は安定せず、困難な時期が続いた。政権内の諸政党の足並みが揃わず短命内閣が続き、西イリアンの帰属問題や、西ジャワ、スマトラ、スラウェシでの地方反乱は常に政権を揺振りつづけた。1951年には、マシュミ⁽¹⁰⁾のスキマン率いる内閣は、急進左派による政府転覆計画があるとして、1万5千人におよぶ共産黨員およびシンパを逮捕した(所謂、八月大検挙)。(Feith 1962: 187-192) 国軍の合理化も主要な政治問題で、議会制と複数政党制に懐疑的な陸軍の一派はスカルノ大統領に議会の解散を求めるまでに至った⁽¹¹⁾。

総選挙は独立以来の懸案であったが、選挙法さえも、各内閣が短命であったことや与野党の思惑のため、1953年4月、ウィロポ内閣のもとでようやく国会を通過した(Feith 1962: 273-285)。同年7月に始まる第一次アリ・サストロア

ミジョヨ内閣は具体的な総選挙の準備日程を発表したが、中央・地方における選挙委員会の構成を巡り政党間で駆け引きがあるなどして準備は遅れ、1955年4月になって選挙の日付けが確定した(Feith 1962: 348-352)。また、選挙法成立後に総選挙実施が遅延したことにより、結果的に選挙キャンペーンが長期化することとなった⁽¹²⁾。しかし、この期間を通じて、総選挙はこれまでの不満足な政治状況から抜け出す道と見做されていた(Feith 1957: 5)。

このような雰囲気の中でスカルノもまた、少なくとも総選挙というシステムを肯定的に評価し、選挙を通じた代議制を民主主義に不可欠な要素として重視していた。1954年には総選挙の準備が始まったことを誇らしげに報告し、「民主主義完成の車輪は回転し始めたのだ！」と宣言した(Soekarno 1954: 198)。スカルノによる選挙を通じた民主主義に関するこのような理解は、後の彼による理解とも、独立直後に単一政党制を唱えた頃の考え⁽¹³⁾とも異なり、むしろハッタの理解に近いものであった。

ハッタは総選挙の二日前に、「来たる9月29日の総選挙により、我々国民は、我々の民主主義を完成させる方向に着実な一步を踏みだすのである。」(Hatta 1983: 43, 強調は筆者による)と述べている。また、彼らは共に選ぶのは人民であることを強調している。スカルノは「総選挙という道を通じて我々の政治生活を健全なものにしよう! 君達にはできる、そう人民よ、なぜなら判決を下すのは、私でもない、ブン・ハッタでもない、軍でもない、内閣でもない、君達だからだ。」(Soekarno 1955: 243)と言い、ハッタもまた、憲法(当時の1950年憲法)にある人民主権の規定を引き合いに出した上で「インドネシア共和国の主権は人民の手にあり、つまり君達皆の手中にあり、政府と国会によって行使される。人民自身によって、選挙権を持つ君達自身によって選出された国会によってである。」(Hatta 1983: 43-44)

しかし、ハッタが人民による直接投票という事実を重視していたのに対し、スカルノの思惑はそれを越えたものだった。スカルノは政党の数が多すぎ、ま

た政党が幾つかのグループに分かれていることを不健全で、不協和音のものであると考えていた。それゆえ、彼は総選挙を通じて政界再編が起り、政党の数が減ることを期待していた。とりわけ彼は国民党が国会で圧倒的多数を占めることを望んでおり、1954年には公の場で国民党の掲げる（そして彼が作り出した）パンチャシラをイスラムに対して擁護する発言までした⁽¹⁴⁾。さらに総選挙を一ヶ月後に控えた1955年の独立記念日にも「何のために数十もの政党が必要なのか？…政党の数を減らそう、来たる総選挙を政治生活の合理化のために利用するのだ。」と演説した。（Soekarno 1955: 243）

思惑の違いはあれ、少なくともスカルノとハッタは総選挙が「民主主義」にとって重要ものであると理解していたが、そうではない勢力も存在した。当時、「人民民主主義政府」⁽¹⁵⁾の樹立を掲げていた共産党は、その目的達成のためには代議制は完全には信用できないとし、そのプログラムで「議会における共産党と他の進歩的諸政党の話し合いによって人民民主主義政府が樹立されるだろうか？そのような政府が、選挙キャンペーンにおいて共産党と他の左翼政党が最大議席を獲得しようとする努力によって樹立できるだろうか？」と問うている（Partai Komunis Indonesia 1955: 18）。彼らが代議制よりも重視したのは労農同盟に基づく民族統一戦線だったが、それでも総選挙や議会を否定するには至らなかった。むしろ、第五回党大会で「総選挙宣言」（Partai Komunis Indonesia 1954b）を採択し、他の諸政党同様、着実に総選挙への準備を進めていたのである。

その一方で、共産党はまた、「民主的権利」すなわち「基本的人権」を「個人の不可侵を保証すること、居住地の自由を保証すること、宗教の自由を保証すること、思想・言論・報道・結社・集会の自由、デモを行なう権利、ストライキおよび労働組合結成の権利、行動と職業選択の自由、全国民が同じ労働にたいして同賃金を要求する権利」と（Partai Komunis Indonesia 1955: 21-22）と、明確に規定している。この中でも、思想・言論・報道・結社・集会の自由

は特に強調されるが、これはスキマン内閣による八月大検挙のような反共運動への警戒・防御線であると考えられる。

2 「民主主義」の変容

1955年9月、遂に実施された総選挙の結果、国民党、マシュミ、ナフダトゥルウラマー、共産党が四大政党となった⁽¹⁶⁾。翌年の独立記念日の演説において、スカルノは総選挙が実現されたことを評価し、結果に対する批判や失望(Feith 1962: 465)からそれを擁護した。

…私は知っている、あなたがたの中にこの前の総選挙の方法・手続きに満足しない者がいることを。私は知っている、「あぁ、あんな人やこんな人が国会に入るなんて」と言う人がいるのを。しかし私は問う、その手続きはかつて国会で合意されたものではないのか？そして民主主義は多数の意思に従うことではないのか？我々は民主主義という基礎に立ちたいのか、否か？我々の誰一人として、現在までに達成されたことに満足している者はいない。私もそうだ。(Soekarno 1956a: 254-255)

彼は選挙結果を擁護しつつも、それに対して自ら満足していないことを吐露している。政党の数が減ることもなく、国民党も圧倒的な勝利を逃した。更に総選挙後の組閣も彼の意に沿うものではなかった。組閣者に指名された国民党のアリ・サストロアミジョヨは、1956年3月16日に組閣名簿をスカルノに提出したが、スカルノはそれを即座には受諾しなかった。四大政党のうち共産党のみが入閣しないことに納得しなかったのである⁽¹⁷⁾。

スカルノがこの直後取る行動に関連して、上で引用した演説中に興味深い下りがある。「インドネシア民族にとって、民主主義の精神と意味は目新しいものでも、**輸入品でもない**。むしろインドネシア民族の血肉の一部なのだ。」という下りである。(Soekarno 1956a: 254, 強調は筆者による) この民主主

義は「輸入品ではない」という文は「民主主義は輸入品である」という肯定文を前提に成り立っているわけだが、半年後にスカルノは「輸入品の民主主義」は「インドネシア民族」とは似わない、という主張を始めるのである。

まずスカルノは1956年10月28日、青年の誓いの日に、複数政党制とそれに基づく「民主主義」が国家統一を脅かしているとの考えを爆発させ、政党を解消せよと主張する(Soekarno 1956b)。この演説は、ほとんどの政党から激しい攻撃を受けたが、二日後には同様の主張をすると同時に、おそらく初めて自ら唱導する「民主主義」に名前を与える。

…私は独裁者にはなりたくない。それは私の精神に反するのです、皆さん。私は民主主義者 (democraat) です、私は真実、民主主義者なのです。しかし、私の民主主義 (democratie) はリベラリズムの民主主義ではない、皆さん、全くそうではないのです。

既に幾度か言いましたが、私がインドネシアに望む民主主義はリベラルな民主主義、西欧にみられるようなものではないのです！そうではなく、私はこのインドネシアに**指導される**民主主義なのです！指導される民主主義、指導される民主主義、しかしそれでも民主主義なのです！(Soekarno 1956c: 24)

また同時に、この演説でスカルノは自らなんらかの構想があることを匂わせた⁽¹⁸⁾。

さらに、スカルノは同年11月10日に開かれた制憲議会の開会演説においても、「…強者による民主主義の使用は制限されなければならない。…すなわち、当面の我々の民主主義は導かれる民主主義、指導される民主主義であり、それゆえリベラリズムの理解の上にはなりたたないものである。」(Konstituante Republik Indonesia 1956: 16) としている。しかし、民選の議会という場であること、そして政党始め各方面からの反発が強かったため、十日前の演説とは異なり、政党解消論は影をひそめた。

スカルノが1956年10月30日に匂わせた構想を「大統領構想 (Konsepsi

Presiden)」と名付け、公表するのはその三ヶ月後である。

…この11年の経験から私が得た確信によれば、我々の採用している民主主義、我々が用いている民主主義はインドネシア民族の精神に似わない。すなわち私が**西洋の民主主義**と呼ぶもの、議会制民主主義と呼んでも良いが、私には明らかである、この11年我々が用いてきた民主主義は、**輸入された民主主義**であり、インドネシアの民主主義ではない民主主義なのだ⁽¹⁹⁾。

1957年の独立記念日の演説においても「インドネシアの民主主義」「規律ある民主主義、インドネシア民族の生活の基礎、すなわちゴトン・ロヨンに相応しい民主主義、一つの目的のために自らに制限を課す民主主義、**指導される民主主義**」である繰り返し主張するが（Soekarno 1957b: 289-291）しかしながら、誰あるいはどのような機関がどのようなプロセスを経て「指導する」のか、あるいは「指導される民主主義」がどのような形態をとるのかという決定的な点は自ら明確にすることはなかった。

スカルノが「大統領構想」を発表したときに最も強力にこれを支持した政治勢力は共産党であった⁽²⁰⁾。それまでに共産党にも大きな変化が生じていた。第一に総選挙で第四党になったことから、議会闘争をより重視するようになったのである。1956年7月30日から8月2日にかけて開催された第四回拡大中央委員会総会では、「議会を通じて、インドネシアの現在の状況から人民権力のシステムへ移行することは一つの可能性である。共産党は全力を尽してこの可能性が現実のものとなるよう努力する。」という政治局報告がなされた。（Sidang Pleno ke-IV CC PKI jang diperluas 1956: 313-314）

第二に、共産党はその言説においてスカルノが独立以前に行なった演説を多く引用するようになる。これは四大政党の一角を占めたにも関わらず、国民党との同盟は崩れ、イスラム政党が共産党と協力することはあり得ず、孤立感が深まったことに起因すると思われる⁽²¹⁾。彼らはスカルノの主張を自らの主張に沿わせ、党の位置を補強すると共に人々に強く訴えようとしたのである。共

産党のアイディット書記長は、同じ第四回中央委員会総会への報告で、スカルノの「パンチャシラの誕生」を引用し⁽²²⁾、「…もし我々がブン・カルノのこの演説がインドネシア人民の感情、思考、欲求を代表していると思えば、…8月革命は民族的で民主的な性格を持つ、つまり反帝国主義的、反封建的革命であった。」(Aidit 1956: 249-250)と言う。

更にアイディットは「パンチャシラの誕生」に基づいて民主主義をこう論ずる。

…インドネシアにおいて、必ずしも西欧の民主主義のレシピにしたがった国家、つまり旧型の民主独裁を維持しつづける必要はない。ブン・カルノが言ったように「我々が民主主義を求めるのなら、実はそれは西洋の民主主義ではなく…社会的繁栄を到来させることのできる民主主義」なのである。民族ブルジョアジーの支配する旧民主主義国家を樹立させない基礎は非常に強固である。一方では、民族ブルジョアジーは政治面で非常に脆弱な位置しか占めておらず、他方では、共産党という指導者をもつインドネシアのプロレタリアートは政治面で無視しえない能力を証明しており、農民や都市小ブルジョアジー、革命的知識人、その他、民主的諸要素の広汎な大衆に指導力をふるっているからである。それゆえ、社会的繁栄をもたらすことのできるものとは、ブルジョアジーに支配される旧民主主義ではなく、「フランス革命のレシピに従った」民主主義（これもブン・カルノの独立準備委員会での発言である）ではなく、人民の全集団のための、あらゆる方面（政治、経済、文化）における民主主義なのである。そのような民主主義のシステムは新しい型の民主主義であり、全人民のための民主主義、人民の民主主義である。(Aidit 1956: 257, 引用符内はスカルノのことば)

興味深いのは、アイディットが当時の民主主義を旧型の民主主義、そして西洋の民主主義をして非難したのが、スカルノが同様のことを喧伝しはじめるの

とほぼ同時か、あるいはそれよりもやや早かったことであり、しかもそれがスカルノからの引用に基いていたという点である。確かに新民主主義や人民民主主義という言葉は共産主義のタームであるが、当時の民主主義を否定的にとらえている点で、後のスカルノの民主主義の概念に一見似たものであり、これは共産党が「大統領構想」や「指導される民主主義」を少なくとも利用可能なものとして受け入れる土壌が既に準備されていたことを示す。共産党は「大統領構想」の発表後、「大統領構想を100%実現しよう！」をスローガンに熱烈にそれを支持する集会やデモを組織していく⁽²³⁾。

1959年7月5日にスカルノが大統領令をもって1945年憲法に復帰し、制憲議会を解散して、「指導される民主主義」を開始する。その二ヶ月後に開かれた第五回党大会において、共産党の微妙な位置取りが明らかになる。

アイディットは、政治局一般報告において、すでに解散された制憲議会を肯定的に評価すると共に「人民によって選出された国会」を強調する（Aidit 1960b: 47）。

この背景には、1957～58年に行なわれた地方選挙において総選挙の五割増の得票率を得たという自信もあったであろうが⁽²⁴⁾、それ以上に、戒厳令下における自らの保身が問題だった（Mortimer 1974: 71）。

アイディットは「人民と人民の諸組織にできる限り広汎な民主主義的自由を与えること、愛国的運動の自由を制限するあらゆる法規を撤廃すること、そして反革命の反逆者やテロリスト集団がいない、あるいは既に排除された地域においては戒厳令を解除すると共に、人民に対して民主主義的自由を即座に回復させること…労働者とその正当な利害を守るためのあらゆる権利と自由を保証すること、労働者のストを禁止するあらゆる法規を撤廃すること」（Aidit 1960b: 55）を政府に要求するが、ここには、もはや自由主義的民主主義は破産したとする一方で、軍事結社に対する警戒と民主的生活を擁護する姿勢が見て取れる。軍への警戒心はまた、「…アジア・アフリカで新たに独立した国々

は軍事独裁国家になりがちである…」(Aidit 1960a: 215) という発言が繰り返されることからよく分かる。

スカルノのことは「民主主義」の意味を根本的に変えてしまった。共産党は、自身の正当性を主張するためにスカルノのことは援用するが、かえってスカルノのことが共産党のことに浸透してしまう結果となった。

3 「革命」の再発見と継続

今日のインドネシアでは、「インドネシア革命」という言葉 (Revolusi Indonesia) は通常独立戦争の意味で用いられる。しかしスカルノは、本論が対象としている時代に、民主主義の意味を変容させるとともに、この「革命」にも別の意味・含意を与えていった。より正確には、彼の「革命」概念が「民主主義」概念の変容をもたらしたのである。総選挙後に、彼は「革命の継続」を訴え始める。ここでは、とりわけ共産党との比較をしつつ、この言葉に焦点を当てていく。

スカルノが、革命は未だ完成せずと主張しはじめるよりも以前に、共産党はこれに似た主張をした。共産党が主張する革命の究極の目的は共産主義社会を実現することであり、1945年から1949年のインドネシア革命を、共産主義社会ないし社会主義社会に至る、より一般的な革命の一段階と看做している (Partai Komunis Indonesia 1954a)。1954年に開かれた第五回党大会で採択された党綱領では次のように謳われている。

インドネシア共産党は、インドネシアのプロレタリアートの最も組織化された前衛であり、最高の階級組織である。共産党はインドネシア人民と国民 (nasion) の利害を代表する。現段階では、共産党はインドネシアにおいて人民民主主義を実現するために闘争しており、一方より長期的な目的はインドネシアにおける共産主義社会実現の初期段階として、社会主

義社会を打ち立てることである。

… [インドネシア革命の現段階は] 新しい型の民主革命であり、帝国主義の時代そして世界プロレタリア革命の時代におけるブルジョワ民主革命であり、…人民民主主義革命、すなわちプロレタリアに指導され、帝国主義、封建主義そして買弁資本家たちに対抗することを目指す、広汎な人民大衆の革命である。(Partai Komunis Indonesia 1954a: 112-113)

共産党は総選挙以前からインドネシア革命を一段階とするより一般的な革命が継続していると認識していた。一方、スカルノも1954年時点でそれに近い認識を洩らしている。総選挙に関連して「この総選挙は、この10年間の我々の革命の成果を確固たるものにするを意味する。」(Soekarno 1954: 245) と述べているが、革命が1945年に始まったとして1954年時点で革命は終わっていないことになる。しかし、この時期にこれ以上のことが語られた訳ではなく、「革命の継続」が中心的なトピックとなり、喧伝されるようになるのは1956年以降である。

総選挙後にスカルノが行なった演説を見ると、彼が「インドネシア革命」に主に三つの段階を設けていることがわかる。第一段階は1945年から1949年の物理的革命つまり独立戦争、第二が第一段階で被った損害から立ち直るための生き残りの時期、第三が発展のための道具を組織する投資の時期である⁽²⁵⁾。

このように、インドネシア革命はより大きな「革命」の一部とされていくが、1958年になるとスカルノはより明確に「革命の継続」を語るようになる。

さあ、我々の革命の**継続**と名付けられたのは何か？革命の継続は、闘争の終了していないあらゆる分野にある。革命の継続は、**闘争**の継続なのである。政治分野における闘争の継続、経済分野、より正確には社会経済分野における闘争の継続、そして民族の個性における闘争の継続である。我々の革命は「複合的革命」であり、政治的、社会経済的、文化的革命であり、つまりは究極的に「一世代に多くの革命をまとめあげた」革命なのである。

革命の一部は他の部分よりも進んでいるが、それでもあらゆる部分が闘争の継続を要求している。(Soekarno 1958: 326)

スカルノは、「革命の継続」を語ると同時に、別のトピック、つまり革命の精神あるいは独立宣言の精神を発展させていく。1956年に、革命における「投資」の段階を説明する際に、人的・技術的投資や物質的投資に加え、精神的投資を挙げている (Soekarno 1956a: 264)。翌年になると、「我々は、我々の精神を積極的かつ活動的な方向に革命化しなければならない。我々は革命の初期のように再び燃えあがらなくてはならない」(Soekarno 1957b: 304) と、彼は精神革命の重要性を強調する。1958年にも「革命の継続」ほどではないものの、同様に強調される。(Soekarno 1958: 345)

この「革命の精神」の指し示すものは曖昧なままであるが、先述の革命の段階論および彼の人民概念に関連があると思われる。後者については後述するが、前者について1959年、「指導される民主主義」の導入後にこのように説明している。1945年から1949年の物理的革命期には「五年もの間、独立宣言の精神は燃えつづけた。」しかし、次の生き残りの段階では、オランダに対する負債⁽²⁶⁾、そして『「革命精神」を犠牲にするという意味での妥協』のために、闘争の資本が減少してしまった。そして、投資の時代においては、「革命精神はほとんど消えてしまっており、炎もなく冷えてしまっている。」(Soekarno 1959b: 353-357)

議会制民主主義の時代は革命の停滞期と回顧されるが、その理由は革命の精神、基本、目的から逸脱したためだと、スカルノは主張する。(Soekarno 1959b: 356) しかし、「指導される民主主義」が導入されたことで、呪いが解けたかのようにその逸脱は修正される。同じ演説で彼は誇らしげにこう言う。

1945年憲法によって、今や我々は革命の基本と目的に沿って働くことができる。

革命の基本と目的に沿って働く理想的な基礎、構造的な基礎は、1945年

憲法に求められる。理想的な基礎、すなわちパンチャ・シラも、構造的基礎、すなわち安定した政府も、どちらも1945年憲法の中にある。…

私は今年を「革命の再発見の年」と名付けよう。

そう、1945年憲法への復帰をもって、我々はすでに「革命を再発見」したのだ。(Soekarno 1959b: 375)

では、総選挙以前に独自に革命を公式化していた共産党は、状況が大きく変化した総選挙後にどのように革命を語ったのか。1956年の拡大中央委員会総会においてアイディットは「1945年八月革命の諸要求を完遂するために統一せよ！」⁽²⁷⁾と題する政治報告を行ない、八月革命を反封建的・反帝国主義的な性格をもち、人民を権力の座につけた革命として評価している。加えて、そのような革命を推進しえたのは共産党であったと発言している。(Aidit 1956: 243) ここには、八月革命を社会主義革命の一段階と位置付けていた総選挙以前 (Partai Komunis Indonesia 1955: 112-113) とはトーンに大きな変化が見られる。「我々は『1945年革命を完遂しよう』という発言を耳にする。しかし、八月革命について何を完遂すべきか何の説明も得られない。」と、革命を完遂できるのは共産党以外にないという自信を窺わせる。(Aidit 1956: 248)

独立革命と独立宣言を強調すると共に、アイディットは革命の「精神と魂」も強調する。この時期にこうした変化が起きたことは、スカルノの語る革命の「精神性」からの影響ないし、スカルノのことばへの擦り寄りであると考えられる。「1945年八月革命の精神と矛盾しない政治信念に敬意が払われる共和国」(Aidit 1960b: 47) を共産党は護るという下りは、やはりこの時期の共産党も自らの活動が制限されることを警戒していたことが見てとれる。

1950年代後半のスカルノは、革命を再発見しその継続を訴えはじめ、革命精神をますます喧伝するようになる。共産党もまた今まで以上に八月革命を強調しはじめ、革命の精神と魂を強調することで、スカルノのことばに寄り添っていく。では、誰がその革命精神をもつ(べき)だとされているのか。言うまで

もなく、スカルノにとっても共産党にとっても革命の担い手は人民であった。次章ではその人民を取り挙げる。

4 声なき「人民」

1950年代半ばまでのスカルノは、ハッタ同様に、人民が選挙を通じて自らの意思を表明することに同意していた。これは総選挙直後の1956年でも変わらず、「今や我々は人民自身の選んだ国会を持っている。…今や民意の色合いは明らかになった。」(Soekarno 1956a: 254)

「大統領構想」を発表し、「革命の継続」を強調し、「指導される民主主義」を唱導しはじめる1950年代後半、スカルノはより頻繁に「人民」について語るようになる⁽²⁸⁾。現実に生活する人民とは次元を異にする、スカルノ独自の「人民」概念が顕著になるのがこの時期なのである。

革命が未完であり、それを継続しなければならない以上、その担い手たる「我々人民」は独立時のようにならなければならない。「我々は人民の竈の火から闘争の炎を取りだした。同時に我々はあらゆる思想・思考を人民の利害へと向かわせた。当時の我々の目的は人民にとって公正で繁栄する社会であった。人民が力を合わせて作り出したものはなんでも革命の道具として用いたものだ。」(Soekarno 1957b: 285)

そのような「革命精神」は一旦は損われ、革命も停滞した訳だが、スカルノによれば、それも修正されていく。1958年には、「1958年の今日人民は既により意識的になっている。…もし何か不都合があれば、今日の人民はどこが指導者の偽りや馬鹿さ加減によって引き起こされたのか、あるいは革命の道筋や若い国家が成長する道筋と本当に一貫しないのか、容易に理解することができる」(Soekarno 1958: 342-343) のであり、1959年には、「我々は神に感謝する。我々の逸脱は墮落に至ることはなかった。丁度良い時期に、我々はハッと気付き、

修正を行なった。丁度良い時に我々は熟考してその逸脱を認識し、正しい道へとハンドルをきったのである。」(Soekarno 1959b: 360-361) というように、人民は独立革命期の精神を取り戻し、その結果1945年憲法復帰を果して革命を再発見したと説明される。

スカルノが語るこの人民はもはや現実の世界にいる人間ではなく、彼にとって理想的な人民像でしかないのだが、しかしそれがスカルノ自身やスカルノの演説を聞く者たちを含むインドネシア人民全体であるかのように語られるのである。「人民」の意思・感情はスカルノが定式化し、それは「西洋式」の民主主義など望まないことになる。しかし、一方でスカルノ自身も、現実の人民が「集会で演説をすることも新聞にインタビューされることも、新聞、にコラムを書くこともない。彼らは黙って働くのである。現在の民主主義においては、彼らには理論的には誰に対しても話す権利が平等にある。しかし、実際には話す機会などないし、そのような機会を利用しようとも思わないのである。」(Soekarno 1957b: 291) とそれが語りえぬ存在であることを認識している。

この語りえぬ人民の声をスカルノは如何にして知りうる、あるいは(恣意的にはなく)定式化するのか? ここにスカルノ一流の‘トリック’がある。すなわち、そもそも彼は「インドネシア人民の代弁者」であり、「人民と最も接触をもつ数少ない人間の一人」だというのだ。(Soekarno 1959a: 94) 後にスカルノが行なった演説に、この「人民の代弁者」という仕掛けについて有名な一節がある。

毎年8月17日の集會に、まさしく今行なわれているような革命の最高機関において、私は対話を行なっているように感じる。誰との対話か? 人民との対話である。私と**人民**との直接の話し合いである。私のエゴと私のアルターエゴの対話である。人間スカルノと**人民**スカルノの会話であり、共に闘う同志のあいだの会話である。実際は一であるところの二者の対話である。

…8月17日の演説は私にとって君たちとの対話でなければならない。8月17日の演説は、真実、君たち、掘立小屋にいる君たち、仕事場にいる君たち、田畑にいる君たち、そう自分自身の口で語ることでできない君たちの代弁とならなくてはならないのだ。(Soekarno 1963: 526)

ここに至って、「人民」が革命を継続し、「民主主義」は人民の票 (suara) ではなく「人民」の声 (suara) にもとづくものとなる一方⁽²⁹⁾、その「人民」とは彼の内にあるものでしかない。すなわち、今や「革命」も「民主主義」は完全に彼に依存しているのである。

では、スカルノの曖昧で理想化された「人民」に対して、やはり人民の代表を自負する共産党はどのように人民を語ったのか。

1954年の第五回大会で採択された文書⁽³⁰⁾において、共産党は毛沢東の理論⁽³¹⁾に倣って階級およびグループについての分析している。そこでは、労働者、農民、漁民、手工業者、知識人、学生、小ブルジョアジー、民族ブルジョアジー、買弁、地主などが挙げられ、農民は更に富農・中農・貧農・小作人の四つに分けられている。そして、小ブルジョアジーや富農・中農などの位置付けが曖昧ではあるものの、これらの要素を彼らが国民統一戦線に参加できるか否かを基準に親人民と反人民に区別しようとしている。

総選挙後の1956年に行なわれた中央委員会総会に提出された一般報告において、アイディットは当時の政治勢力を分析する (Aidit 1956)。彼によれば、外国の帝国主義者と共謀している封建主義者と買弁資本家から成る石頭勢力、労働者・農民・都市小ブルジョアジー・革命的知識から成る進歩勢力、そして民族ブルジョアジーやその他の愛国的・反帝国主義的勢力から成り中道勢力の三つに分けられる (Aidit 1956: 247)。一見すると、共産党を含む第二勢力が第三の中道勢力と協力し、第一勢力と対決するという明解な図式である。しかし、詳細に見るとアイディットの説明は錯綜し、あまり有効な分析とは言い難い。

まず、地主階層の一部を比較的進歩的な左派地主とし、中道勢力に含めた。次に、石頭勢力については、(1) 共産主義者に常に反対し、インドネシアを外国の帝国主義の支配下に置こうとする者、(2) 自らを反共産主義としながらも親帝国主義ではないと規定する者、(3) 帝国主義者が共通の的であるという認識のもとある程度は共産主義者と協力できる者の三つに分類し、第三の者たちは民族統一戦線に参加できるとする⁽³²⁾。また、中道勢力の中には、石頭勢力と似た傾向を持つ右派が存在すると指摘される。この複雑な分類は、できるかぎり広汎な勢力を統一戦線に含めようとした結果であろうが、却って親人民・反人民の、あるいは誰が人民に含まれ誰が含まれないのかという区別が曖昧になる結果となっている。

1959年に至っても上述の階級分析、政治勢力分析は維持される。その一方で、「大統領構想」から1945年憲法復帰に至る政治状況を論ずる中で、人民はこのように描かれる。

確信に満ちた大多数に支持された大統領令によってインドネシア人民が1945年憲法に復帰した後は、スカルノ大統領の指導下で、スカルノ大統領の構想にある考えに沿って、ゴトンロヨン内閣を形成することを人民が望んでいるということは、非常に納得がいく。しかし、スカルノ大統領とジュアンダ首相の率いる実務内閣—ゴトンロヨン内閣ではない—の形成により、当面はこの人民の望みは満たされない。インドネシア人民は、途半ばにして立ち止まることはなく、人民が政府プログラムの実施を要求する権利を持ち、またいつでも閣僚は大統領によって交替させられうるというスカルノ大統領の発言を忘れない。インドネシア人民は、民族統一を愛し、民主的、進歩的であり、その実践的な政治要求、つまりゴトンロヨン内閣の形成を放棄することはない。(Aidit 1960b: 52)

民主的、進歩的で、大統領構想を支持し、その実現を求めつづける人民は、スカルノの曖昧な人民概念に容易に接続可能なものとなってしまった。

5 結論

1960年、「指導される民主主義」導入の一年後、スカルノは遂に民選の国会を解散する。これは、次の総選挙での勝利という共産党の夢を打ち砕き、同盟者のいない共産党は特に反共傾向の強い陸軍に対して自らを護るためにも、また自らの組織拡大のためにもスカルノとの協力、あるいは彼への依存は避けられなかった。これによりスカルノは、国軍から物理的な力を、共産党や国民党など彼を支持する組織を通じて民衆の支持・動員を得ることとなった⁽³³⁾。彼に反対する政治勢力があっても、その両者を用いて、政治の表舞台から排除することができた。同年には、マシュミとインドネシア社会党が、1965年にはムルバ党が解散させられた。選挙を通じた代議制という意味での民主主義は完全に否定された。代議制に代替したのは、「人民の代弁者」というスカルノ一流のトリックであり、人民はもはや「票(suara)」も「声(suara)」もたず、スカルノによって代弁されるだけの存在となる。

まとめとして、スカルノが語る民主主義の変化を一般の言説に位置付けてみたい。独立以前のスカルノは西欧的あるいは自由民主主義を否定しているが、総選挙前後では一見それを受け入れているかのような発言をしていた。しかし、1956年のうちにそれは一変してしまう。後者の変化の原因は、総選挙の結果への不満とすることができよう。前者を含めると、このように考えるのが妥当である。総選挙以前は、総選挙の実施によって政治的困難が解決されるであろうという期待感が広がり、また民主主義を総選挙に基づく代議制であるとする、ハッタに代表されるような言説が支配的だった。スカルノ自身はそのようなシステムに懐疑的であったものの、彼が「パンチャシラの誕生」で示し、また後に唱導するような「民主主義」が受け入れられる雰囲気ではないと感じ取っており、それを強調しようとはしなかった。しかし、総選挙後にはその結果に

対して、あるいは政治状況が総選挙以前となんら変らないことに対して不満の声が出始めると、スカルノは懐に抱いていた「民主主義」実現のため、自らそれを唱導し、支配的な言説を自ら形成していく。

一度、スカルノのことばが支配的になると、他の政治勢力もそれに影響され、あるいは巻き込まれていく。「未完の革命」という（表面上は）同様の認識を掲げていた共産党は、政治的必要性からスカルノに近づくが、共産党が議会制民主主義を幾ら擁護しようとも、それはもはや無効あるいは劣勢にある言説であり、結局共産党の言説はスカルノのことばで満たされ、政治上も言説においてもスカルノに依存していくことになったのである。

2004年の総選挙を控えたインドネシアで、今後どのような「民主主義」が展開されるのか、まだ何も分からない。現在は言説を流布させるメディアも、1950～60年代とは比較にならないほど量も種類も増え、かつてほど支配的な言説を作り出すことは容易ではないと思われる。しかし、インドネシアの「民主化」はスハルト時代のみならずスカルノ時代への反省をもとに進展することを願いつつ論を閉じたい。

- 1 筆者がインドネシアに滞在していた1998年に、スカルノの演説集『革命の旗の下に (Dibawah Bendera Revolusi)』(二巻本)が100万ルピア以上の値で売りに出される程であった。
- 2 ナサコム (Nasakom) とは、民族主義 (Nasionalisme)、宗教 (Agama) そして、共産主義 (Komunis) の頭文字で作ったアクロニムである。実際は、この三勢力に加え、国軍がパワー・バランスに重要な役割を果たしたため、軍 (Militer) を加え、ナサコムル (Nasakomil) 体制と呼ぶこともある。
- 3 独立戦争の終結からこの時までには一般に、「立憲民主主義」ないし「議会制民主主義」の時代と呼ばれる。
- 4 スハルトの新秩序体制 (Orde baru) は総選挙を形式上は行なったが、スカルノ体制化では行なわれなかった。しかしながら新秩序下における総選挙は明に暗に操

作され、民意の反映とはとうてい見做せない結果であり、やはり自由で正当な選挙は行なわれなかったと言える。更に両者とも自らの敵を政治の世界から排除した。スカルノはマシュミ、社会党、後にはムルバ党を解散し、初代首相シャフリルやナッシール元首相など多くの政敵を投獄した。一方スハルトはより残忍な手段で、時には剥き出しの暴力によって殺すことさえ厭わず、時には‘合法的’な政治的・行政的手段を用いて、敵を排除していった。

5 ラヤット rakyat という言葉は通常「人民」（英語であれば people）と訳されるが、（日本語における）「国民」という意味も持つ。また、「下層の・貧しい人々」という意味も持つ。同種の言葉に、バンサ bangsa があるが、これは通常「民族（nation）」と訳されるものの、やはり「国民」の意味も持つ。両者の違いは重要であるが、本論のスコープを越えており、改めて論じたい。

6 ハッタは、日本占領下そして独立後においてスカルノと協力関係にあったが、国家統治に関してスカルノとは根本的に異なる考えを持っていた。オランダ留学から帰った1930年代には民族主義運動の方向性についてスカルノと論戦を張った。彼らの間の不一致から1956年7月20日にはハッタは副大統領を辞し、その後はスカルノ批判をおこなった。

一方、共産党は1960年代におけるスカルノとの協力関係が有名であるが、それ以前は必ずしもそうではなかった。1950年代初めにはスカルノを民選の議会に選ばれた正統な大統領ではないと非難していた程であったが（PKI 1950）、1955年ころを境に両者の関係は良い方向に変化しはじめる。総選挙の前後に共産党と国民党（Partai Nasionalis Indonesia）との同盟が崩れ（Rocamana 1975: 138-140）、共産党はその代替者を探していた。総選挙で善戦し四大政党の一角を占めることとなったものの、共産党は入閣を果せず、それに対して抗議したのは他ならないスカルノだった。

7 インドネシア歴代憲法の前文に含まれているパンチャシラ（Pancasila、建国五原則）には、多少の相違を含みつつも「民主主義」が一原則として含まれている。1945年憲法では「協議と代議制において叡知によって導かれる民主主義」、1949年および1950年憲法では簡潔に「民主主義」が原則の一つとして挙げられている。ただし、パンチャシラにおいて「民主主義」と訳されるクラヤタン（kerakyatan）は、人民（rakyat）という名詞が抽象名詞化したものであり、人民主義とも訳しうるものである。このdemokrasiとkerakyatanの差異は非常に興味深いだが、本論文で論じきれるものではなく、稿を改めて論じたい。

8 オランダ植民地時代、日本占領期を通じて、インドネシア人の参加する議会ない

インドネシアにおける民主主義を巡る言説

- しそれに準ずるものは存在した。オランダ植民政庁は倫理政策の一環としてフォルクスラートを設立し、日本軍は中央参議院をジャワとスマトラに設立した。しかしながらいずれの「議会」も代議制民主主義を実現するものではなく、統治者の諮問機関にすぎず実質的権限は持たなかった。
- 9 ハーグ円卓会議によって1949年11月2日にオランダが、インドネシア共和国および独立戦争中オランダの影響下に建てられた複数の国家から成るインドネシア連邦共和国に主権を委譲することで合意し、これは同年12月27日に発効した。
 - 10 インドネシア・ムスリム協議会 Majelis Syuro Muslimin Indonesia。当時、インドネシア最大のイスラム政党。独立当初はインドネシア唯一のイスラム政党であったが、1952年には伝統派イスラム団体のナフダトゥル・ウラマー (Nahdlatul Ulama) が離脱し、独自の政党を設立した。
 - 11 所謂、10月17日事件である。1952年の同日、軍合理化に賛成する陸軍主流派が、民衆のデモ隊、そして戦車まで駆りだして、国会議事堂つづいて大統領宮殿におしかけ、国会の解散と総選挙の即時開催を求めた。スカルノはこの要求を拒否し、この運動を主導したナスティオン参謀長は職を解かれた。Feith (1962: 246-273) Legge (1972: 254-256) を参照のこと。
 - 12 選挙キャンペーンの詳細については Feith (1957)、に詳細な記述がある。
 - 13 これは当時の実質的な議会によってその考えを拒否されている(Legge 1972: 211)。
 - 14 Feith (1962: 281) を参照。当然のことながら、イスラム諸政党から猛烈な反発を受けた。
 - 15 共産党は、人民民主主義政府を「社会主義的な変革は求めず、民主的な変革を求める政府」であり、「反帝国主義勢力を結集し、国内の商業と産業を外国との競争から保護し、労働者の生活水準を引き上げ、失業をなくす政府」であると定義している (Partai Komunis Indonesia 1955: 13)。
 - 16 257議席中、国民党とマシュミが57議席づつ、ナフダトゥル・ウラマーが45議席、共産党が39議席獲得し、その他の議席は議席数8以下の小政党が占めた(Feith 1957)。
 - 17 数日後、スカルノは組閣名簿を受け入れたが、共産党からもそのシンパからも入閣はなかった。この問題に関しては、Feith (1962: 467-469) を参照のこと。また、アリ・サストロアミジョヨの自伝では、組閣名簿をスカルノに提出した際の会話が記されている。(Sastroamidjojo 1974: 343-345)
 - 18 Soekarno (1956c: 27)。これに対する各党の対応はFeith (1962: 518) を参照のこと。
 - 19 Soekarno (1959a: 81)、強調は筆者による。この演説は大統領宮殿で行なわれたが、同時にラジオで放送された。政府発行の資料が入手できなかったため、

Soekarno (1959a) と共に、共産党の機関紙である「ビントアン・メラ (紅い星, Bintang Merah)」に掲載されたもの (Soekarno 1957a), および日本語訳日本国際問題研究所インドネシア部会編を参照した。この構想の二つの柱は、あらゆる政治勢力を反映する「ゴトン・ロヨン」内閣の結成と、国民評議会という諮問機関の設置であったが、内実に乏しかった。

- 20 共産党の理論誌「ビントアン・メラ (Bintang Merah, 「紅星」の意)」は1957年1月・2月号で「大統領構想」特集を組み、これを歓迎した。
- 21 先述の第二次アリ・サストロアミジョヨ内閣への入閣問題が一例である。
- 22 Soekarno (1945(1989)). スカルノのこの演説は日本占領下で設置された独立準備委員会において、1945年6月1日に行なわれたものである。アイディットがこれを引用したことは、1954年の第五回党大会における一般報告で、スターリンの「ソビエト連邦における社会主義経済の諸問題」を引用していることと著しい対照をなす。
- 23 Feith (1962: 541), および R. Mortimer (1974: 71) を参照のこと。1957年に開催された第五回中央委員会総会においてアイディットが行なった一般報告の題名が「スカルノ大統領の構想を100%実現するために、力の均衡を変えよう!」(Aidit 1957) であったことも、共産党がいかに熱烈に大統領構想を支持していたかを示している。
- 24 これら地方選挙における共産党の躍進については、D. Hindley (1964: 222-229) を参照のこと。
- 25 スカルノの設けた革命の諸段階の説明には、多少の振れがある。1956年には、「我々は既に闘争の二つの段階、すなわち武装革命の段階と武装革命の結果を克服する段階を経験してきた。「物理的革命」の段階と「生き残り」の段階である。そして今、私はこのように言おう、我々は「投資」の段階にある。」(Soekarno 1956a: 256) と言っている。1957年には、「我々は今、私がよく演説で言うように、革命の第二段階、すなわち「国民建設 (nation-building) の段階にある。国民 (natie) を建設する、民族 (bangsa) を建設する段階である。我々の革命の第一段階は、「枷を破壊する」段階、「解放」の段階であった。」(Soekarno 1957b: 300) とし、二段階になる。1958年には、再び三段階となる。(Soekarno 1958: 316)
- 26 ハーグ円卓会議においてインドネシアは、オランダ領東インドの負債43億ギルダーを引き継ぐことで合意し、これはインドネシア政府の経済状況を圧迫していた。
- 27 D. N. Aidit (1956). なお共産党はほぼ一貫してインドネシア革命を八月革命を呼んでいる。
- 28 スカルノが毎年独立記念日に行なった演説において「人民」という単語が出現す

る回数だけでも大幅な増加が見られる。(土屋1982: 502, 註44)

29 Partai Komunis Indonesia (1955); Partai Komunis Indonesia (1954a,b); Aidit (1953, 1954)。このうちアイディットの政治報告「インドネシアにとっての人民民主主義への道」(Aidit 1954) はもともと1953年の中央委員会総会に提出されたもの(Aidit 1953) に若干の手を加えたものである。

30 「ピンタン・メラ」1954年2・3月号には「連合政府のために」の翻訳が掲載されている。(Mau 1955)

31 Aidit (1956: 251)。このことは、総選挙の直前に、国民党内で右派が優勢となったことで、共産党との同盟関係が崩れたことの反映でもあろう。

32 1963年には、インドネシア共産党は公称360万人の党員を誇る非共産圏最大の共産党であった。

また、2000 万人もの大衆団体を従えていた。

33 インドネシア語では、「票」も「声」も同じ単語 suara である。

【文献】

Aidit, D. N., 1953, "Djalan ke Demokrasi Rakjat bagi Indonesia," *Bintang Merah*, 1953 (September/Oktober): 432-71.

———, 1954, "Djalan ke Demokrasi Rakjat bagi Indonesia," *Bintang Merah*, 1954 (Februari/Maret): 86-8.

———, 1956, "Bersatu untuk menjelesaikan tuntunan2 Revolusi Agustus 1945," *Bintang Merah*, 1956 (Djuli/Agustus): 237-95.

———, 1957, "Ubah imbangan kekuatan untuk melaksanakan konsepsi Presiden Soekarno 100%!" *Bintang Merah*, (Mei/Djuni/Djuli): 145-95.

———, 1960a, "Suksesnja Kongres Nasional ke-VI adalah Kemenangan Demokrasi jang besar," *Dokumen-dokumen Kongras Nasional ke-VI Partai Komunis Indonesia*, Djakarta, 7-14 September 1959 (*Bintang Merah Nomor Spesial*), Djakarta: Jajasan "Pembaruan", 206-17.

———, 1960b, "Untuk Demokrasi dan Kabinet Gotong-Rojong," *Dokumen-dokumen Kongras Nasional ke-VI Partai Komunis Indonesia*, Djakarta, 7-14 September 1959 (*Bintang Merah Nomor Spesial*), Djakarta: Jajasan "Pembaruan", 8-137.

CCPKI, 1950, "Ir.Soekarno Sebagai Presiden Belum Sah," *Bintang Merah*, 1950 (15 September): 35.

- Feith, H., 1957, *The Indonesian Elections of 1955*, Modern Indonesian Project, Southeast Asia Program, Cornell University: Ithaca.
- , 1962, *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*, Ithaca: Cornell University Press.
- Hatta, M., 1983, "Rakyat Indonesia, Datanglah Memilih," *Kumpulan Pidato*, Vol. II Jakarta: Inti Idayu Press, 43-6. The speech on September 29th 1955.
- Hindley, D., 1964, *The Communist Party of Indonesia*, Berkley and Los Angels: University of California Press.
- Konstituante Republik Indonesia, 1956, *Risalah Perundingan Tahun 1959, Djilid I*, (Bandung): Konstituante Republik Indonesia.
- Legge, J. D., 1972, *Sukarno: A Political Biography*, Sydney: Allen & Unwin.
- Mau, T.-t., 1955, "Tentang Pemerintah Koalisi," *Bintang Merah*, 1954 (September/Oktober): 307-66.
- Mortimer, R., 1974, *Indonesian Communist Party under Sukarno: Ideology and Politics, 1959-1965*, Ithaca and London: Cornell U.P.
- Partai Komunis Indonesia., 1954a, "Konstitusi Partai Komunis Indonesia (PKI)," *Bintang Merah*, 1954 (Februari/Maret): 112-32.
- , 1954b, "Manifes Pemilihan Umum," *Bintang Merah*, 1954 (Februari/Maret): 89-99.
- , 1955, *Program Partai Komunis Indonesia*, Djakarta: Departemen Agiprop Central Comite Partai Komunis Indonesia. (This program was affirmed in its 5th Conference in 1954).
- Rocamana, J. E., 1975, *Nationalism in Search of Ideology: The Indonesian Nationalist Party 1945-1965*, Quezon City: Philippine Center for Advanced Studies.
- Sastroamidjojo, A., 1974, *Tonggak-tonggak di Perjalananku*, (Djakarta): Kinta. Ali Sastroamidjojo's autobiography.
- Sidang Pleno ke-IV CC PKI jang diperluas, 1956, "Resolusi tentang Laporan Umum Politbiro kepada Sidang Pleno ke-IV Central Comite PKI jang diperluas," *Bintang Merah*, 1956 (Djuli/Agustus): 308-17.
- Soekarno 1945 (1989), "Lahirnya Pancasila (Pidato pada Sidang Badan Usaha Persiapan Kemerdekaan, di Jakarta tanggal 1 Juni 1945)," in *Pancasila dan Perdamaian Dunia : Sebuah Kumpulan Pidato*, Jakarta: Haji Masagung, 1-24.
- , 1954, "Berirama dengan Kodrat," in *Dibawah Bendera Revolusi*, djilid 2,

- 193-218.
- , 1955, “Tetap terbanglah Radjawali,” in *Dibawah Bendera Revolusi*, djilid 2, 219-47.
- , 1956a, “Berilah isi kepada hidupmu!” in *Dibawah Bendera Revolusi*, djilid 2, 249-79.
- , 1956b, “Pidato P.J.M. Presiden Soekarno pada Hari “Sumpah Pemuda” tgl. 28 Oktober 1956 di Djakarta,” in *Indonesia, Pilihlah Demokrasi jang Sedjati*, Djakarta: Kementerian Penerangan R.I., 3-15.
- , 1956c, “Pidato P.J.M. Presiden Soekarno pada Resepsi Kongers P.G.R.I. ke-8 pada tgl. 30 Oktober 1956 di Bandung,” in *Indonesia, Pilihlah Demokrasi jang Sedjati*, Djakarta: Kementerian Penerangan R.I., 3-15.
- , 1957a, “Menjelamatkan Republik Proklamasi (Tjatatatan stenografis dari pidato Presiden Soekarno tgl.21 Pebr. 1957 djam 20.05 di Istana Merdeka),” *Bintang Merah*, 1957(Djanuari/ Februari): 12-23.
- , 1957b, “Satu Tahun Ketentuan (A Year of Decision),” in *Dibawah Bendera Revolusi*, djilid 2, 281-311.
- , 1958, “Tahun tentangan (A year of Challenge),” in *Dibawah Bendera Revolusi*, djilid 2, 313-47.
- , 1959a, “Konsepsi Presiden,” in Notosoetardjo ed., *Proses Kembali kepada Djiwa Proklamasi 1945*, Djakarta: Endang, 81-95.
- , 1959b, “Penemuan kembali Revolusi kita (The Rediscovery of our Revolution),” in *Dibawah Bendera Revolusi*, djilid 2, 349- 91.
- , 1963, “Genta Suara Republik Indonesia,” in *Dibawah Bendera Revolusi*, djilid 2, 519-56.
- 日本国際問題研究所インドネシア部会編, 1972, 『インドネシア資料集上——一九四五～一九五九』東京：日本国際問題研究所。
- 土屋健治, 1982, 『インドネシア民族主義研究：タマン・シスワの成立と展開』東京：草思社。
- 白石隆, 1997, 『スカルノとスハルト』現代アジアの肖像, 第11巻, 東京：岩波書店。